



会場風景 (市川義輝会員撮影)

第十五回自然保護全国集会

「登山者ができる自然保護」をテーマに

自然保護委員会

九月十五・十六日、平成二年度自然保護全国集会在静岡支部のご支援のもとに三島で開かれた。台風の影響で大荒れであったが、参加者は十時三十分三島駅前集合、バスで柿田川に向かう。幸い雨が止み、公園入口で柿田川自然保護の会の漆畑信昭会長の説明を伺う。柿田川湧水は富士山や御殿場地方に降った雨や雪が、地下の不透過層の上に堆積した多孔質の三島熔岩流の空洞を流れ、その末端で湧水となって地表に現れたもので、湧水量は一日約百万リットル、町の中で、しかも国道一号线の真下にありながら、山奥のように深い緑の森に囲まれ、アマゴやアユ、ヤ

マセミ、カワセミ、カワトンボ、ハグロトンボなどの姿が見られ、高地の植物であるミシマバイカモも生育している。しかし最近有機溶剤が微量検出されたり、農薬汚染や造成による汚染もみられるようになったので一九八八年トラスト運動が始められた。緑の小径を入ると美しい水面がひろがる。湧水池で自然の甘みのある水を味わったり、展望台から湧水群を見おろしたり、ミシマバイカモの花を見たりしてバスに戻る。ここで参加者一同として三万円をトラスト委員会に寄付することに決めた。バスが走り出すとまた滝のような雨となり、道の側溝も濁流となつてあふれかかっている。御殿川で昼食の後、徳川時代から水源涵養林として守られてきた函南原生林へ向かう。しかし激しい雨のため、見学は、一番手近

な、樹齢五百年というアカガシの巨木
アは雨のため取止め、屋内での懇親会となった。参加者の顔合わせと、山田会長、安間静岡支部長の挨拶のあと、松田常務理事の音頭で乾杯が行われ、サクラエビやクロハンペンをおつまみに賑やかな交歓となった。フジノシラユキノエの農兵節で手拍子を合わせ九時に閉会、その後は食堂に席を移して夜が更けるまで二次会が続けられた。
十六日、昨日の荒天とは違って変わったおだやかな曇り空、七時三十分玄関前で朝礼、中委員の号令で全員朝の体操をする。八時四十五分研修室に集まり、山口委員の司会で「登山者ができる自然保護」のテーマで自然保護全国集会在開かれた。松本理事の開会の辞に続き山田会長の挨拶「自然保護は質的にも地域的にもひろがりが大きくなった。JAC自然保護委員会のすべき事は、一つは自分でできることか



1990 年 (平成 二年)
11 月号 (No. 545)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 第 15 回自然保護全国集会……………(1)
- 「タンボチェ僧院再建募金」最後のお願い……………(2)
- 海外の山……………(4)
- 女の「ドーラギリ-高雪峰」毎日新聞、八千峰「無酸素」登頂の報道記事に思う……………中島道郎…(5)
- 第 1 回「海外登山基金」助成登山隊報告(1)……………(6)
- 東西南北……………(8)
- 「スイスのエーデルワイスと 14 回目の出会い」「二つの古道」ほか図書紹介……………(12)
- 「福井の山 150」「Avalanche Safety for Skiers & Climbers」ほか自然保護随想……………(13)
- 報 告……………(15)
- 「冬期マッキンリーの登山と気象遭難 (3)」「第 14 回若葉会山行」「ビアパーティ」
- 会務報告……………(16)
- 九月理事会、ルーム日誌、タンボチェ僧院再建協力募金者ご芳名、住所・住居表示変更、新入会員(復活)
- 図書受入報告……………(18)
- お知らせ……………(18)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

お知らせテラフ電話

234 六六五九

の所まで急斜面をおりるにとどまらな。午後五時前、箱根の里少年自然の家に着き、入所式六時からセルフサービスの夕食。キャンプファイ

らやる、もう一つは外からの破壊に対して山を守ってゆくこと、この二つだと思われる」。静岡の安間支部長「自然保護とは人間そのものの問題であるから、個々の問題と地球規模の問題とを結びつけて考えてゆかねばならない」。議長沢井委員長「個人の力は限られているので、山岳会というまとまった力で、数をしばって運動をしてゆく。全国集会も回を重ね連帯感もできてきたので、一体となって活動を進めたい」。松田理事からはヒマラヤン・アドベンチャー・トラストの趣旨説明があった。

ここから支部報告となる。
〈秋田支部〉昨年急逝され福田委員に代り新たに委員となった宮田委員「支部としては特に活動していないが、個々の会員がいろいろな自然保護団体に入って活動している、ブナを守ることにが主体となっている。白山山地では、既に作られた林道の崩壊の始末が問題となっている。葛根田や八幡平のブナの問題、そして太平洋地域では、ブナを伐ると下の田圃に影響が出てくるので、村役場から県に働きかけている」。

〈山形支部〉佐藤委員「鳥海山の八幡町でヒューマン・グリーンライフによるリゾート構想がありスキー場を作る計画だ。地元の署名が集まらず困って

いる。全国的なマスメディアに訴えるしかない。自然保護委員会のご協力を願いたい」。

〈越後支部〉石田委員「ゴルフ場、スキー場開発が各地で行われているが、JACとしてはどこまでタッチしていくか。やはり山に関連のある国立公園、県立公園の開発に反対してゆくりである」。

〈静岡支部〉永野委員「昨年池口岳西尾根に個人営業小屋建設の動きがあった。お花畑もあり、シカやカモシカも沢山棲息している所なので、小屋による環境破壊の心配があったが、幸い建主が断念した。光岳から池口岳までは原生自然環境保全地区になっているが、法的な網をもっと広範囲にひろげる必要がある」。

〈京都支部〉塚本委員「京阪電鉄が出町柳まで延びたので登山者が急増し、鞍馬山あたりの林がメチャメチャになった。溪流沿いのファミリーハイキングで北山の汚れが激しい。学校教育およびファミリー登山、高齢者登山の指導が必要である」。

〈関西支部〉篠崎委員「和泉葛城山のブナが開発により激減、また関西国際空港の開発に伴い、リゾート地としての計画があり、六甲の二の舞になるおそれがある」。中谷委員「昨年の全国集会で署名をして頂いた畝傍山周辺開

「タンポチエ僧院再建募金」最後のお願い

高所登山委員会では、昨秋より今日までタンポチエ僧院再建募金の窓口を担当して参りました。平成二年九月末現在で、募金額はわが国の山岳団体を併せて約四〇〇万円(内本会分三〇〇万円)で、当初の目標額一〇〇〇万円には、程遠い状況にあります。

一方、現地再建委員会からの報告によりますと、去る四月二十七日、着工式がタンポチエ僧院ヘッドラマN・T・ジャンボ師、ヒラリー卿、多数のシエルパ達によっておごそかに行われたようです。

ルクラから上の部落では、各戸に割り当てがなされ約七五〇万円が集められたそうです。彼等の所得水準を思いはかると、まことに胸のいた

発反対の件は残念ながら不成功に終わった。
〈山陰支部〉小西委員「大山は五十年以降は頂が禿げ、皮も肉もとれて骨が出ている状態で、これをどうしたらよいか、一木一石運動をやっているが困難である。郷土を守るといことは①生物の根源である自然を残す②生態を

守る教育をする③大山ひいては日本の歴史を守る、この三点であると思う」。
〈福岡支部〉松本委員「まず啓蒙運動が必要である。山に登らせて頂くという感謝の念をもつべきである。開発は空果のように狙っているから常に監視していなければならない。また開発が始ってから反対するのではなく、開発

む思いであります。

会のレベルでの募金は本年十二月末日をもちまして終止符を打ちたいと思っておりますが、どうかシエルパ達の故郷であるタンポチエ僧院再建のため、左記の要領で募金を継続してまいりますから、趣旨をご賢察の上、可能な範囲で善意をお寄せ下さいませよう最後のお願いを申し上げます。

記

一、一口 五千元(何口でも可)

二、募金振込先

◆郵便振替 東京七―三〇六〇一

「タンポチエ僧院再建協力会」宛

◆協和銀行市ヶ谷支店 「タンポチエ僧院再建協力会」 口座番号

三六五四六六 普通預金

お問い合わせは、日本山岳会事務局宛お願い致します。

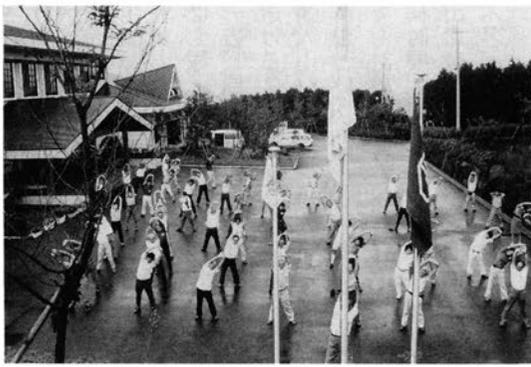
高所登山委員会

させるなどという運動を積極的に行うべきである」。

〈熊本支部〉田上委員「地方の行政の考え方には、開発は地域活性の切り札であるという神話がある。開発に伴う工事が大きな収入源となっている。阿蘇地方は農産物自由化で農業不振のため、開発に熱心である。一方原生林の伐採を止めるために、独立採算制廃止を、声を大にして林野庁に訴えるべきである」。

富士支部からは資料の配布のみ、指導員の腕章の件。鳥海山では遊佐町でも大規模開発を計画している等々の発言があった。

このあと五つに分れてグループ討議



朝の体操 (市川義輝会員撮影)

にうつる。昼食のあと各グループのリーダーによる討議のまとめの発表があり、一時三十分閉会、全員名残りを惜しみつつ散会した。

今回は七十二名の参加者があり、熱心な討議がなされた。宿泊の手配その他、さまざまな準備にご尽力頂いた静岡支部の皆さまに心からお礼を申し上げます。

◇ ◇ ◇ (中村あや)

A グループ討議のまとめ

海外登山における自然保護 登山者ができる自然保護との立場から発言を求め、その要約

(1)山に持ち込んだゴミはすべて持ち帰る。

山を汚さない意味で、全員からの要望となった。ヒマラヤの高所といえども、ボンベやテント等、持ち上げたものを持ち帰れないはずはない。ジープの入る山麓の村まで、帰路のポーター代も予め用意して、必ず持ち帰るようPRを徹底する。

(2)物資を有効に利用する工夫

ナムチュエバザールなど山麓の基地には、酸素タンクや、空輸できないガスボンベを備えた公営店を作り、高所から降ろした酸素ボンベを再充填したり、現地の薪は消費せず、トレッカーまで含め、ガスコンロで炊事できるようにする。

(3)現地の環境保全に対し進言の努力を行う。

山麓の人々との話し合いや、調査を通じて、薪採りで林が後退している地区には、太陽電池、水力・風力発電機の設置を要望する。女性が子供を生むための道具と考えられている村では、まづ人心把握のため、寄生虫駆除や、栄養摂取の啓蒙を実施し、子供は間隔をおいて生み、健全に育てるのが最大の繁栄につながる等の教育を行う。以上のような要望をヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト等に進言していく。

出席者 山田二郎、山本朋三郎、松田雄一、塚本珪一、中村純二、中保、安間荘、大石惇、梨羽時春、武田満子、関塚貞亨、久米実(十二名) (中村純二)

B その地域に住む人々との調和を考えた自然保護

このテーマには多くの出席者が集り、さまざまな意見が出たので、短くまとめるのは困難だが、総論として「自然破壊をとまなう開発は基本的には悪である」とする点で一致した。問題は地元町村の生活との関係である。

開発が生活上どうしても切実な場合と、切実とは言えないが、「よりオイシイ生活」を夢見ての場合があり、後者の例として、国土計画KKによる鳥海山があげられた。切実な場合でも、や

りかたがあり、日本山岳会のとるべき態度として、次のような啓蒙運動が望まれた。

(1)地域住民とよく話し合う(2)その自治体とも接触する(3)日本山岳会自然保護委員会が現地を視察・啓蒙する。

より積極的な提案として、現状のまま自然保全をすべき(または復元すべき)地域を全国から選び、保全指定する作業を急ぐことが挙げられた。この方法は法的規制力は持たないが、確かに有効な「攻撃は最大の防御」の例と考えられる。

出席者 藤井健、石田国夫、松本徑夫、竹端節次、長田義則、本多勝一、齋藤桂、出口一良、遠藤光男、佐藤淳志、中村あや、永野敏夫、渡辺富士子、堀江真理子、須藤節子、市川江子、田村説三、林田正幹、酒井明徳(十九名) (本多勝一)

C 尾瀬を例とした自然保護

尾瀬問題は終戦後の自然保護運動の草分けとも言えるべき象徴的な存在で、既に毎月の自然保護委員会が一年近く討論をし、現在はまとめの段階にある。すなわち「みずばし」の時期を中心に、余りにも多くの入山者が訪れるので、それに伴う環境保全をどうするかという問題である。

本分科会では池田原案を基にした修正案について、忌憚のない意見が展開

された。

(1) 早期実現に向けて、とるべき第一の対策は輸送体系の確立であって、自家用車・バスは峠まで上げず、駐車場を完備した入山口で止めること。

(2) し尿・雑排水の処理浄化に努力する一方、風呂・食事に伴なう汚染は極力避けるよう努力する。

(3) 入山料について、安易に徴収すれば済むという単純なものでなく、委員会でも討論してきたように、さまざまな検討要因がある。

出席者 渡辺正臣、石間信夫、小倉厚、木名瀬巨、市川義輝、北村義男(六名)
(木名瀬巨)

D 登山者が個人でできる自然保護

(1) 登山道は大切にし、道をはずれて歩かない。新規の登山道はなるべく作らない。

(2) 生ゴミも含めて、ゴミは捨てず、駅まで必ず持ち帰る。そのためには、ポリ容器やビン詰、缶詰などの内容物は他の袋に入れかえるか、予めさけて持っていく。缶ジュースの代りに水筒を利用したい。

(3) 高山植物だけでなく、凡ての植物を大切にし、絶対採らない。野鳥や昆虫も大切にす。

(4) 自然を大切にす教育を、家庭内はもちろん、文部省にも働きかけて、学校でも盛んにして貰う。個人的な山行

海外の山

女の「ドーラギリリー高雪峰」

ダウラギリリー峰(八一六七呎)を世界で初めて記録に残したのは、一九〇〇年、仏典を求めてチベットに入った修行僧、河口慧海だった。「チベット旅行記」の中で彼は、「ドーラギリリー高雪峰」の表現でその峠を攀じる苦しさを語っている。

アルピニズムの世界でこの山を「難峰」と位置づけたのは、それからちょうど半世紀後の一九五〇年、モリス・エルゾークを隊長とするフランス隊が偵察の末、この山をあまりの峻険さ故に断念、隣のアンナプルナに転じたことからだ。

「人類初の八千呎峰」の輝かしい呼称は、その結果アンナプルナのものとなってしまったが、ダウラギリリーは実際、その後十年は「難峰」であり続けた。エベレストが登られ、K2が登られ、カンチェンジュンガが登られたというのにダウラギリリーだけは、一九六〇年軽飛行機まで繰り出したスイス隊の八人が這い上がってくるまで誰一人頂上に寄せつけず、中国領内のシシヤパンマ(当時)は、もっぱらゴザインタンと呼んだが)と共に、この山は残された最後の八千呎峰となったのである。

河口慧海から九十年後の今年十月九日午前四時半、二人の日本女性が標高七千三百呎の第三キャンプを出発した。日本女子登攀クラブ隊の安原真百合、木村文枝で、共に三十五歳。エベレストにも登ったダウ・ツェリンら二人のシェルパが一緒だった。

スペイン二隊、スイス、アメリカ、各国合同隊などあ

わせて七隊が入っていたために、ルート工事は殆ど必要としなかった。天気は申し分なかったが、風が強く、その分寒いのがかたえた。

二人は、八八年にもガッシャブルムII峰(八〇三五呎)に登っている。高度については、だから恐怖感はなかった。「高さを体験しているって、強いと思いませんか」と、木村は言っている。酸素は睡眠時だけ使った。午後一時五分、登頂。九月十四日のベースキャンプ入りから二十六日にして、二つ目の八千呎峰が足下にあった。

ダウラギリリーには一九八二年ベルギー隊が第十二登を果した時、リュトガルド・フィフェイスという二十五歳の女性が登っている。八七年にはアメリカ隊の二十七歳の女性隊長、キャサリン・カフーンが女性第二登を果した。日本隊の二人は、何番目の登頂であるかなどことさ意識せず淡々と登ってきたようだが、河口慧海が知ったら、びっくりする出来事ではある。

二人は第三キャンプまでその日のうちに戻ったが、途中曇る眼鏡をふくためにオーバー手袋をとったせいでろろ、木村の指が凍傷にやられ、帰国を早める事態になった。

エベレスト、K2など四つの八千峰に登ったポーランドのワンダ・ルトケビッチ、この三年、ナンガ・パルバット、ガッシャブルムI峰、同II峰と毎年八千呎を登っている遠藤由加など女性クライマーのジャイアンツへの挑戦は日常化しつつある。二十一年前「女だけのヒマラヤ」を目指して創立した「女子登攀クラブ」は、これで四つの八千呎を手中にした。

(江本嘉伸)

海外の山

の際にも、行き合う他の登山者に注意し、お願いする。

(5) ラジオなどの音を大きくしたまま山を歩かない。山頂やコースの途中に、不必要なプレートやテープをとりつけない。

(6) 日本山岳会で作ったフィールド・マナー・ノートの内容をよく守る。

出席者 山口俊輔、望月計市、水野公男、太田義一、田上敏行、川北仁、山口亮、賀嶋増造、中谷絹子、近藤浩之、横山隆、田中茂夫、黒沢秀夫、渡辺徹、宮田菊雄、森博、徳田静雄、茂木洋子、(十八名) (横山 隆)

E リゾート法と自然保護

池田委員より、リゾート法に関しての復習と、地方行政団体の申請・承認件数の報告があった後、活発な意見の開陳が行われた。

総合的にみて、欧米のリゾート思想を日本に持ち込んで、自然観の異なる日本では満足感や豊かさは得られない。また都市体系型の画一的スキー場・ゴルフ場を持ち込んでも、大企業との利益につながるだけで、地域の活性化や、都市との交流にはならず、若者の希望も得られない。結論は次のとおり。(1) リゾート法による大開発は、今の若者や子孫に対し、自然破壊という多額のツケを残した。中止すべきものは即刻中止すべし。

(2) 一人一人が、リゾート法をよく理解して、開発の現況を注意深く見守る必要がある。

(3) 自然保護の元兇は自然教育のなされていない点にある。自然との接し方、遊び方を十分に子孫に伝える必要がある。これがやがては、自然保護やゴミ対策につながることになる。

毎日新聞、八千^ノ峰「無酸素」登頂の報道記事に思う

中島 道郎

先頃、毎日新聞紙上に、二回にわたって、愛知県の鈴木孝雄氏が「五二歳」で日本人八千^ノ峰「無酸素」登頂最高齢者記録を打ち立てた、という記事が載った。それによると同氏は、パキスタンのガッシャーブルムII峰(八〇三五^ノ尺)に挑戦、日本人で最高齢の八千^ノ峰無酸素登頂を成し遂げた、というのである。年齢の如何にかかわらず、この山に登頂されたこと自体素晴らしいことであり、心から祝福申し上げる。しかし、この新聞が彼を賞賛する理由が「無酸素」登山にある点、大いに問題である。そもそも「無酸素」登山なるものはそんなに大層なものなのか? そのことを少し論じてみたい。

八月上旬、最初にその報道があった直後、たまたま大阪毎日新聞社の編集

出席者 井上義郎、井上松江、西郷正郎、小西毅、池田剛、篠崎仁、小西奎二、麦倉啓(八名) (麦倉 啓)
前記以外の出席者 松丸秀夫、国見利夫、市野弘、石田稔郎、松本恒広、望月福次、小林清彦、沢井政信、長田友人(九名)
出席者総計七十二名 (中村あや)

局長と社会部長のお二人にお会いする機会があり、このような扱いは正しくない、とする筆者の意見を述べておいたのであったが、それから約一カ月たって、同じ意味の報道が繰り返された事実を鑑み、これが世間一般の常識だとすると、これでは困る、せめてわがJACの会員諸氏にはもう少し専門的な見識をもって頂きたいものだと思いい、筆を執る次第である。

鈴木氏にしても、無酸素登頂というだけでもはやされるのは本意ではあるまい。彼の偉大さは別の所に求められるべきである。実際、五九歳で八千^ノ峰に登った筆者の経験からすれば、八千^ノ峰こそこの高さ立つこと自体はそれほど大したことではない。いわゆる「無」酸素か否か、など

は全く問題にならない、と主張したい。そして、それでもまだ、「無酸素」登山にこだわる人達に対しては、あなた方は八千^ノ峰といったら、恐ろしい所、大した所、と想像しているのでしょうか、行ってみると、そんなに大層な所ではありませんでしたよ、とお伝えしたい。

山高きをもって尊しとできるのは、筆者の考えでは、エヴェレスト、K2、カンチエンジュンガなど、八五〇〇^ノ尺以上の山々に限られよう。それ以下の山々は、登攀困難をもって尊しとすべきである。その根拠は、人類の生命維持に関わるほどの低酸素環境とは、八五〇〇^ノ尺以上の所であろうと、経験的に考えているからである。ただし、生理学的にはまだ定説はない。とにかく、酸素を吸わないで行動した、ということが賞賛の的になりうるのは八五〇〇^ノ尺以上のことである。それ以下の所では、酸素を吸わないで登ったとしても、それは順応をうまく獲得したという意味で自慢できても、使わなかったこと自体は何の自慢にもならないし、まして公に賞賛されるべきことでは決していない。それに、その賞賛に値すべき八五〇〇^ノ尺峰以上の「無酸素」登頂にしても、エヴェレスト峰の実践者の半数は帰ってこなかった事実を目を向ける

とき、人はそれがもはや無謀登山の範

瞬に入るものであることに気付く筈である。一九七八年、メスナーとハーベラーによってエヴェレストの頂上が「無酸素」で登られ、この高さにおける人類生存の可能性が証明されてしまった現在、もはやそれ以上の記録はありえず、所詮は彼らの行為の追従であり、それに致死率五〇%を賭ける意味は失われている。

登山は畢竟遊びである。遊びであるからには安全第一であるべきであらう。登山自体危険な遊びである以上、予想できる危険は予めできるだけ排除してかかる、というのがルールというものではあるまいか。したがって、酸素が、予測される危険の排除のために使用されるなら、それは積極的に使用されてしかるべきであり、その時使用したからといって、使用しなかった場合よりは劣った登攀である、と他人がそのように評価すべきではない。

高所登山における酸素の意義は何かといえ、それは安全登山のための一つの道具と答えたい。そのことは、筆者は事あるごとに唱えていることなもので、あまたか、とお感じの読者も多からう。では何の道具かといえ、それは山を速く登るための道具である。酸素を吸えば、吸わないよりは登高速度が速くなる。つまり、氷雪登山におけるアイゼンにピッケル、あるいはザ

イルにユマールのような、安全と速度向上のために用いられるべき道具なのである。仮に今、冬の富士山にわらじ脚絆に金剛杖で登ったとしよう。それは絶賛されるべき偉大なる登山に違いない。しかし、それは今ではアナクロニズムであり、無謀登山の誹りは免れえず、いわんや祝福される登山などではありえない。無酸素登山は丁度それと同じようなものである。それに酸素は一種の睡眠薬でもある。錠剤の睡眠薬なら問題にならないのに、気体の睡眠薬を用いた登山は程度が下がると考えるのは間違いである。

これは、酸素を吸いながら登った者の負け惜しみか? そう思う人もあるかもしれない。しかし、これは別の機会に書いていることであるが、実際問題として、筆者が酸素を吸って登ったのは、若い隊員達の迷惑になりたくなかつたからである。無酸素で登って時間切れになり、若い人達を巻き添えにして登頂断念、という事態にはなりたくないなかつた。その上、常づね酸素の積極的使用を主張し続けてきている手前もあつた。結果論的には無酸素でも十分登れている。しかし酸素を吸いながらの登山は快適であつたし、そのことを残念だつたとは決して思っていない。

とは申せ、登攀用酸素は高価であ

り、すべての登山隊が用意できるわけではない。そのうえ、無酸素登山は酸素を吸って登る場合に比べ、より苦しい登山であり、それに耐えて登ることは意義深い。しかしそれらはいくまで個人の問題であり、他人が評価するこゝとではない。もうこの辺で、酸素を使ったか使わなかつたかでもって、登山の質を問うという考え方は、止めにして頂きたいものである。

第一回「海外登山基金」助成登山隊報告(1)

(社)日本山岳会

(社)日本山岳会東海支部

支部長 湯浅道男

日中友好天山山脈雪蓮

峰登山隊一九九〇

隊長 徳島和男

帰国の報告とお礼

初秋の候、皆様には、益々ご清栄の段お慶び申し上げます。

さて、この度は、(社)日本山岳会東海支部の日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊一九九〇に対しては、皆様の深いご理解と暖かいご支援を戴き有り難うございました。私達は、登山、調査を終えた今、皆様に感謝しつつ資料を整理し

ております。公式報告書は、資料整理ができ次第作成する計画であります。が、とりあえず帰国の報告をし、皆様の暖かいご支援とご協力に厚くお礼を申し上げます。

七月十八日に日本を出発した本隊は、北京を経て、新疆ウイグル自治区の区都烏魯木齊に着き、ここで、新疆登山協会の方々との今後の登山活動の打ち合わせをした。本隊は、烏魯木齊を七月二十日に出発し、天山山脈の登山基地阿克蘇の街に着き、ここで日本から輸送した隊荷を受け取り、また、現地調達のお糧等を購入した。この街を七月二十二日に出発し、最北の集落、破城子四大羊牧場を目指したジープ、マイクロバスは、谷筋で集中豪雨による鉄砲水に襲われ、あわや横転という危機にさらされた。四大羊牧場からのキャラバン・ルートは、天山山脈を南北に横断する歴史的なシルクロードの水河古道で木札爾特河に沿っていた。八六年、八八年に水河の雪解け水による濁流で困難を極めた木札爾特河には、牧場近くに橋がかかっていた。木札爾特河左岸に渡り順調にキャラバンを進め木札爾特河支谷阿克奇谷谷合いにキャンプした。八八年、八九年に馬が墜落死した難所の阿克奇谷左岸に沿うキャラバン・ルートも今年、少

少数民族の協力で随分整備されていた。事故もなくキャラバンを進め、カラクメ氷河舌端三一〇〇呎地点にベース・キャンプ(BC)を七月二十五日に建設した。

ヒマラヤ山脈に比べ高緯度に位置する天山山脈(北緯四二度付近)では、雪線が低く、三〇〇〇呎程の高さからアップ・ダウンの激しい氷河のモレーン上の登高が始まり、中継キャンプ(TC₁)(三五〇〇呎)を七月二十七日に、さらにそこからモレーン上を登高し、雪運峰より東に伸びる主稜線が南と東に分かれるジャンクション・ピーク(JP)への下部氷河と支尾根を挟んだ南側モレーン上の氷河湖畔に前進基地となるアドバンスベース・キャンプ(ABC)(四一〇〇呎)を七月二十九日に建設した。そこからジャンクション・ピークへ続く南東尾根に登攀ルートを決定し、ヒドン・クレバス帯、アイス・ホール帯を越え、急な氷雪壁を登って第二中継キャンプ(TC₂)(四八〇〇呎)を八月一日に、さらに急峻な氷雪壁に固定ロープを十ピッチ張り直登し第一キャンプ(C₁)(五二五〇呎)を八月三日に、さらに雪田をトラバースし急な雪壁を登り第二キャンプ(C₂)(五九五〇呎)をジャンクション・ピークの南東肩に八月七日に建設した。さらに、ジャンクション・

ピーク下部岩壁のガリーを登り、上部雪壁をトラバースして主稜線に出た。北側に大きく張り出した雪庇に注意し主稜線をたどりジャンクション・ピーク(六四五〇呎)を越えた直下の岩陰に頂上アタックの第三キャンプ(六四〇〇呎)を八月十一日に建設し登頂態勢を固めた。

翌日八月十二日、C₃、C₂から第一次アタック隊七名が午前七時暗闇の中ヘッド・ランプの明かりを頼りにアタックに出発した。主稜線北側の雪庇を避け、南側雪壁上部をトラバース気味にルートをとり、所々現れる岩場に固定ロープを張りながら最低鞍部まで進む。そこからさらに頂上までは、稜線上をたどるが岩峰に行く手を阻まれ退却した。翌日十三日、C₃メンバーで第一岩峰を巻きながら第二岩峰との間のルンゼ(希望のルンゼ)までルートワークを進め、頂上アタックの見通しを立て、全隊員が休養の為、ABCまで下った。ここで二日間の休養をとり、登頂態勢を立て直す。今後の天候、隊員の疲労状態、また、食糧の状態を考へ、八月十八日を最終アタック日と決める。隊の総力を上げて挑むことを決定する。八月十六日、十七日にかけて、アタック隊員は、それぞれC₃、C₂に移動する。

八月十八日強風、雪煙渦巻く頂上を

目指し、薄明かりの中、午前八時、八名でアタックに出発。希望のルンゼに固定ロープを三ピッチ張り第二岩峰上部に出る。第二岩峰は大きな雪庇の縁に不安定な支点をとりロープを固定しながら乗り越す。そして、所々岩盤の出た氷雪壁をトラバースし、オーバーハング気味の雪壁に固定ロープを張り乗り越すと、頂上へ続く大きな雪壁に

乗る。腰まで潜る深い雪を、体力のある学生隊員が交替しながらラッセルをするがなかなか前進できず、夕暮れの迫った午後十時、頂上直下(六五〇〇呎付近)で雪洞を掘り、ビバークとなる。舞い上がる粉雪で雪洞の入り口がふさがれ息苦しさを感じ目を覚ます。氷点下二〇℃を越す寒さに耐えながら一夜であったが希望の夜明けが訪れるのを待つ。翌日八月十九日は、粉雪が舞い上がっているものの、連綿と連なる中ソ国境の山々が眼下に見渡せる

まずまずの天気であった。午前九時に雪洞を飛び出し頂上に向かう。雪庇とヒドン・クレバスに注意しラッセルの先頭は四〇呎のザイルを一杯に垂らしながら進む。ついに、十一時三十分、八人の隊員が念願の頂上に立つ。各隊員が肩を抱き合って喜びを分かち合う。中国、日本の国旗、また母校の山岳部旗をかざして記念写真を撮ったり、頂上の石をザックに詰めたりして

一時三十分には頂上に別れを告げた。帰路のキャラバンでは、阿克奇谷出合いの難所を、日本側隊員も馬方となり、中国側協力員、少数民族と協力し合い日中友好協力のもとで切り抜け、八月二十八日登山基地阿克蘇に全隊員無事下山した。

阿克蘇地区招待所、烏魯木齊国際空港には、日本雪運峰登山隊凱旋の朱の横断幕が掲げられ熱情歓迎であった。新疆ウイグル自治区人民大会堂での各マスコミ記者との会見、それに続く初登頂祝賀会は、人民政府外事部長、新疆ウイグル自治区体育委員会主席、新疆登山協会主席の臨席のもとで盛大に行われた。また、北京では、中国登山協会主催の祝賀会が開かれ王鳳桐常務副主席から私達の四次に亘る雪運峰挑戦の意気込み、初登頂の榮譽を称えるお言葉を戴いた。

本隊は、烏魯木齊、北京經由で九月三日に帰国しました。八月二十八日登山基地阿克蘇で別れた学生隊員は、西域の歴史的な街カシュガル、タシュクルガンを経てクンジュラブ峠よりパキスタンに入り、そして、インド、ネパール、中国チベットと旅を続けながら民族学的調査をし十二月中旬に、また、九月三日北京で別れ学生隊員は、中国東北部の歴史学的調査をし九月下

旬に帰国する予定である。

一方七月二十五日に日本を出発した別働隊は、天山北路・南路に点在する古代シルクロードの面影を色濃く残す街々を訪れ、遺跡の写真撮影や少数民族との友好交流をした。また、白銀に輝く雄大なアルタイ山脈の懐深い草原で牛馬、羊を友に遊牧生活をするカザフ族、キルギス族のパオを訪れ、生活実態を調査したり、写真撮影をして、八月十五日に帰国した。



スイスのエーデルワイスと 十四回目の出会い

坂倉登喜子

今年もヨーロッパ・アルパイン・ツアー、第十四回目の「花と氷河の旅」に、去る八月八日より十九日まで、四十九名の一行と、予定通りスイス、オーストリアと、全員無事に山と花と人との出合いを楽しみながら歩いてきました。ヒマラヤのエーデルワイスを見に行った翌年、ヨーロッパの本場のエーデルワイスを訪ねてはとすすめられて

昭和五十二年に第一回を企画し、同行してから早くも十四回目を迎えました。

毎年花の好きな方達と歩き続け、中には三回も一緒に歩いて、スイス病にかかっている方もいるエーデルワイス・ツアーは、スイスでもオーストリアでも大勢の団体で大歓迎されています。私たちは山に登り、峠や高原を歩きレベルや体力に応じた班別にするので安全に楽しめますが、本来の目的はエーデルワイスとの出会いが魅力です。

今年もツェルマットの一級クラスのモンセルバンホテルに泊って、スネガからウーターロート・ホルンに登り、その下山路でまた新たなエーデルワイスのお花畑で、白く高貴な花々に出会うことができ、マッターホルンを真正面に仰ぎながら、ランチタイムをとった一日は、今回のハイライトでした。JAC越後支部会員のU夫妻も健脚で、A班に参加され、ヘルンリ小屋までお元気に登られました。

最後のオーストリア・ハイリンゲンブルーートの奥にあるグロスグロックナー下の氷河からの下山路を大勢で足並みが揃って立派に歩いたと拍手でガイドに褒められ感激して涙を流しました。最後は音楽祭で賑わうザルツブルグ

で約一時間ショッピングして、ミュンヘンに向い、その夜は有名な高級ビヤホール、シュパテンハウスの個室を予約して、最後のビール飲み放題で乾杯後、かも料理と素敵なおデザートを出されたのに、持って行ったお赤飯に飛びついたため、せっかくの名物料理を残してしまい誠に残念でした。帰路はフランクフルト経由で暑い日本に安着しました。

二つの古道

太田 敬

その二 大峰山吉野道

葉桜の吉野山は閑かである。取り巻く峰々をすっぽり覆い包む杉林の深緑、その間に点綴する椎若葉の萌黄色、そして叢に咲き競うつつじの紅紫も捨て難い。道沿いの軒端に作ってっせん濃紫が情を添える。そんな「上の千本」に程近い、本道から一寸外れた高台の小ざっぱりした民宿の泊りは、「いよいよ明日こそは」と快い緊張と喜悅の一夜だった。

翌朝は明けやらぬうちに宿を出た。車を駆って十分、金峰神社の鳥居下、林道に車を置いて、身仕度もどかしく歩きます。

忘れもしない、六十二年前、私が中学一年の夏休みに、三人の先生に引率

された生徒十人の一行に加わって山上ヶ岳に登った時のことだ。あの時、私達はカーキ色の制服、制帽、草鞋に蔵王堂を経て金峰神社にやって来た。ここで狩衣姿の神官から朱印を押して貰ったり、茶店で金剛杖まがいの白木杖を求めて賑やかに歩き出したのは十一時頃だったろうか。しかし今朝は六時と早い。茶店もない。神官もない。全くの無人だ。森閑とした古びた拝殿にひとり額いて、お宮の脇から登山道に入った。覚えはないがこれは当時と同じ道に違いない。そう思うと懐しさもひとしおだ。

伝承によれば、役行者の開山以来十余年、よく生きながらえた古道である。古来、峰入りは必ず金峰山寺蔵王堂を起点として山上ヶ岳の大峰山寺まで二十六キロのこの道を辿ったものだ。今では距離の近い洞川道が専ら利用されるようになり、この吉野道はすっかり寂れてしまった。しかし私にとっては「昔歩いた」という親しみだけではない。後年の私の山登りの起点ともなり、方向付けにもなった大切な「吉野道」なのだ。それを是非もう一度歩いて見たいのだ。

木暗い路傍に「従是女人結界」の石碑を見た。大峰山の「気」が漂っている。その「気」に浸って青根ヶ峰の裾

道を行くほどに、思いがけなく明るい広い車道に出ってしまった。これは、これほど驚いた。新しく造成された林道だ。さらに奥まで伸びている。流石の靈山も開発の波に抗し難いのか、些か幻滅を感じて歩くこと十分で車道は途切れた。「かくれ平」から再び古道に入ってホッとすする。よく踏まれていて歩きよい。木の間に望む目路はかな山波はすべて深緑のビロードに覆われている。吉野杉のふる里だ。

先は長い。山腹のなだらかな上りも歩度を抑えてゆっくり歩く。とにかく嬉しい。長く心にありながら今日までお預けだった大峰行に今踏み出したのだから。ひとりの道行ではいろいろのことが頭に浮ぶ。当時よくも大峰行を計画された、創立早々の灘中学の山好きだった校長先生のこと、それに快く参加を許してくれた父親のことなど、感謝の外はない。

一時間余で新茶屋跡にきた。茶屋の跡形もない。杉落葉に埋る四寸岩山の西の肩だ。向うから人が来た。兜巾とんぼに篠懸姿、金剛杖を突く山伏姿の先達と白衣の一行だ。聞けば今朝四時に山上を出たという。それにしても早い足だ。丁寧に挨拶を交して行過ぎた。百丁茶屋までの長いだら下りもずつと杉木立。屈託なく、すくすくと天に伸びた壮年期の一本一本が、梢近くまで丹

念に枝打ちされて揃っている。よくも念入りに手をかけたものだ。並大いでない労力だ。名木造林の伝統に感心する。

百丁茶屋。当時は番人がいて熱い番茶の接待を受けた覚えがある。今は跡形もない。崩れかけた苔むす石垣が残るのみ、古い小祠と石塔が立っていた。行手に立ちほだかる大天井岳は東側を巻く。雑木林の急坂のあとほどこまでも奥深い杉林だ。このあたりもすべり易い裸丸太が架っている。私はい右足腰をかばいながら慎重な渡りだ。そんな途中の二箇所の水場は有難かった。五番関までがとて長く感じられた。もう五時間殆んど歩きつめなのだ。しかし私の体調はよい。呼吸も乱れない。まだまだ先があるのでじっくり抑え気味に運びながら、心中に、中学生の自分に置きかえて見たりしながらひた登る。

正午前に五番関に着いた。行程の一つの区切りだ。ここにも「女人境界」の碑があった。錫杖がコンクリートの台座に固定して突立っている。小祠がある。丸太造りの冠木門が上手うまに立っている。行者はここで祈禱するのである。私は腹ごしらえをして腰を上げた。

の登りだ。いつしか杉林に別れて広葉樹林に入る。若葉が目映えて鮮かだ。原生の針葉樹も混っている。灰白色の枯巨木が目につく。ひとしきりの急登で高度を上げたが、木の間越しに振り返り見る大天井岳の方がまだ高そう

だ。小さな上り下りの反復、一寸した露岩や鎖場を過る。尾根筋の叢林には杉林とは趣の異なるさがある。緩やかな笹原の小径を、疲れを癒しながらゆっくり下ると不動明王の銅像が現われた。石塔や石像が林立している。洞ノ辻である。五番関から二時間余、私としてはまずまずというところ。トタン屋根の粗末な休み所には番人はいない。薄暗い奥に祭壇があり抹茶香くさい。私は縁台に腰を下ろして、竹の皮をひらいて梅干入りの大きなむすびを頬張った。

洞ノ道から幾組かの白衣の人達が登ってくる。皆、行者姿の先達に従って黙礼して過ぎて行く。お互いに「霊場に登拝する」という一体感が見える。信者ではない一介の登山者の私にしても、いうにいわれぬ床しさと安らぎを覚える。

山上ヶ岳の宿坊はもう近い。高度差二百ほど、あと一踏ん張りだ。岩尾根の急登が始まった。木製の梯子や階段の連続だ。それにしても些か人手を加えて過ぎていく。楽には違いないが、こ

までしなくても、と思うが、もしこれがなければ手強い岩登りを強いられるだろう。

六十二年前の思い出をかつて私はこ

う綴っている。
「百丁茶屋を過ぎ、洞ノ辻に来る頃はもう夕日が西に傾いていた。杉林に別れを告げて樅や唐檜の原生林の道にかかる。亭々たる巨木、立枯れの大木の下うっそうたる小暗い密林に入るとさすがに深山に来た感もひとしおで、山の靈気が緊々と身に迫る思いであつた。

暮色蒼然たる中をどこまで行けばよいのか。わいわい喧しくやって来た生徒たちにも一抹の不安が感じられた。先を急がねばなるまい。

ところが、最年長の老先生の足取りが怪しくなつて来た。一步一喘、数歩行つては立ち止る。劇しい息づかいだ。若くて元気な体操の先生が心配顔で付添っているが施す術もない。老先生を置いて行くわけにはいかない。どんどん夕闇が迫る。一行の歩度は鈍る。山上ヶ岳の宿坊はもう近いのである。うが、原生林の木の根と岩角の急坂は足もとが暗い。前進できなくなった。雨も降ってきた。遂に立往生だ。…」とは今登っているこのあたりでのことだったろうか。記憶はさだかではない。

「そのとき、もう一人の若い桜井先生が意を決してひとりて宿坊へ助けを求めに行くという。くれぐれもここを動かずじっと待つ様に我々生徒に言い含めて、先生は空身、手探りで暗闇の彼方へ消えて行った。それからどのくらい時間がたったことか。時折強く降りかかる雨に濡れて闇の中で、生徒達は案外陽気に菓子やキャラメルを食べながら、へらへら口をきき合っていた。二時間余も待ったであろうか。山奥の

彼方の闇にちらちら灯影らしいものが見えかくれする。気のせいではないようだ。だんだん近くなり、灯の数がふえてくる。『おーい』と呼ぶ声がかきこえる。突如として屈強そうな寺男の一団、十数人が手に手に弓張提灯をかざして暗闇の中から躍り出て来た。生徒たちは一斉に歓声をあげた。疲れ切った老先生は寺男に背負われた。生徒たちはめいめい寺男のごつい手に引きずられて歩き出した。

こうして無事に竜泉寺の宿坊に着いたのはもう十一時過ぎだっただろう。深夜にも拘らず宿坊では総出で迎えてくれ、温い夜食を出してくれた。

このときほど桜井先生を頼母しく、有難く思ったことはない。あの長身瘦軀、白色の、一見弱々しく見える桜井先生を見直した思いであった。その先生は私共が卒業後数年の頃結核で早逝

されたと聞いて暗然とした。大峰山と桜井先生とが今でも私の心の中に強く焼きついている。…」

登りながら当時のことで頭が一ぱいになった。鐘掛岩が左手に現われた。当時の行場巡りは鐘掛岩から始まり蟻ノ戸渡、東の覗と廻ったおぼえがある。蟻ノ戸渡では「悪い心の奴はここで落るぞ」と先達に怒鳴られて、ただもう必死だったことを思い出す。次いで「西の覗」の石柱も見えた。当時、無理矢理にザンゲさせられた「西の覗」にも寄ってみたいが今はそんな余裕はない。一刻も早く着きたい。

こうして洞ノ辻から一時間余、私としては案外早く待望の竜泉寺宿坊に到着した。それは思ったより粗末な「風雨に痛んだトタン葺の建物だった。それでも、記憶は怪しいが、正面の破風は昔のままの様に思われた。私の心は弾んだ。凸凹の石畳につまずきながら、私の足は宙に浮いた。勇み立って、もどかしく、玄関の重い大戸を引き開けた。まさに、私なりの「大願成就」の瞬間だった。(一九九〇・五)

◇ ◇ ◇
十文字峠本道と大峰山吉野道と両方を歩いてみて、そのいづれもが期待にたがわず、我が意を得たことを知って嬉しかった。前者は古来、人びとの暮しを結んだ大切な峠路、後者は古来、

人びとの心に糧した宗教の道だ。開道の沿革は両者全く異なるが、どちらも私の祖先の多くが踏みしめた古い道だ。それが見事に自然に融合して生きている。かけ替えない貴重な文化遺産でもあるのだ。この先人が遺した、あるがままの姿を末永くいつまでも大切に後世に伝え遺して貰いたい。これは私の切なる願いである。(一九九〇・八)

「オーロラの下で」を観て

中村 純二

小倉茂暉会員の仲介により、テレビ朝日から日本山岳会の会員全員に映画の招待券が贈られたので、早速東映へ見に出かけた。

三十年も前になるが、私はオーロラ観測のため昭和基地で越冬し、カラフト犬のタロ・ジロと共に三週間余り大規模旅行に出かけた経験もあるので、大変興味深く鑑賞できた。

高感度フィルムを進歩のおかげで、オーロラはよく撮影され、壮大な動きも十分捉えられていたが、所どころ人工的に赤の着色が行われていたり、駒落し撮影のため、動きが実際より数倍早いのが私には気になった。

シベリアの凍てつく大地で、橇曳きを天職と心得て忠実に疾駆するハス

キー犬達の姿は感動的であった。またオオカミを数十頭も使ってロケを行ったスケールの大きさや、オオカミとライカ犬の間に生れたオオカミ犬ブランチの吠え声や、その表情の迫力にも、圧倒された。

しかし、最も感銘を受けたのは、チェルスキー山脈を背景にしたアナジリー地方のトナカイの大群やチクシ人テントの空中撮影ないし大写しであった。そこでは厳しい自然の中で、人間と犬との精一杯の生き方や暖い交流、あるいは広大なツンドラ地帯の清らかさがよく現れていて、強く印象に残った。

藤江画伯のネパール画集を緋いて

辰沼 廣吉

藤江さんの画面にあうと、はっとするような新鮮な感動を覚える。見覚えのある風物に思いが巡り始める。土地の臭いまでも呼びおこされる。

このネパールの家屋の町並には、どこまでも続く山なみを宿すように映る。

おそらく色彩感覚が我々の美意識をゆさぶり、赤でなく青でなく瑠璃色まで昇華させる妙味がひそんでいるのだろう。

その中に根源的に表現された純白色の山嶺は岳人の心を引きつける。
画伯は昭和初期から画道一途に独立美術、双台社研究所その他で研修をつまれ、白日会会員、日本山岳画協会会員として活躍され、各種の受賞をされた。

同時にネパール国の風物、山岳に没入し、その旅は止ることなく十数回におよび、その足跡はルンビニからラジガルにおよび思索をさらに深められ、ゆるがない筆跡をつまれた。

度重なる個展を通じて画伯と岳人の交りを願いながら今後ともますますの発展を祈るものである。

村木潤次郎

藤江幾太郎氏(会員番号七五九三)のネパール画集が「山と溪谷」社から出版された。私は若い時、偶然、同氏を存じ上げる機会があったが、絵書きさんだと知ったのはかなり後のことである。昭和二十六年の秋だと思うが、JAC東京都支部主催で、丹沢塔ヶ岳の集中登山のような行事が行われた。私は勘七沢のグループのお世話をしていたが、その時の神奈川県岳連側のリーダーが藤江さんであった。なんとなく歯切れのよい御方だという印象のまま時が経ち、十年程前の年次晩餐会で再会して今日に至っている。その藤

江さんの画集については、ネパールヒマラヤを懐しむ者の一人として何か応援したいとは思っても、私ではどうも歯が立ちそうもない。辰沼大先輩をわずらわした次第である。

Adelaide 氏

十月一日、昨日『山』九月号を入手しました。いつも郵送していただくのはとても勿体なく、恐縮して拝読しております。日本におりました時は『山』の読みたいところだけ読み、あとはファイルしていましたが、こちらに参り、皆さまのお顔を拝見する代りに隅から隅まで一字残らず読み『山』って本当は中々味のあるもので、その辺の会報とも違出し、ましてや雑誌ともちがいます。こちらで毎月読むたった二つの日本語の印刷物です。一つはJAC『山』、もう一つはキリスト新聞です。

漸く寒い冬が過ぎて昨日あたりから春らしくなりました。ここの陽ざしは強いので朝10℃昼25-28℃位になりますとスリープレスのサマードレスを女性達は着ていますし男性は上半身裸で働いています。尤も黒い背広を着ているのは大体大学出のサラリーマンです。

村木副会長の自然保護講演会におけ

る問題提起の関塚さんがまとめられた記事をゆっくり拝読いたし日本でなんのかんのと言っている、その自然の破壊度は恐ろしくひどく、こちらでは昔のままのをいたるところに残して都市作りをしながら自然をこれ以上損ねないことに腐心しています。日本の悪名はJACの皆様は殆どご存知なく、ゴールドコースト辺の土地ころがしから始めてオーストラリア人が入れない程高い入会金をとる大ゴルフ場を作ったり、客人であるべき日本人が我物顔にふるまっています。シドニーなどと競りあったMFPがアデレードに決って、私は此の不景気な田舎都市が少しでも活性化されればよいと考えています。反日本的グループにとても良い口実を与えたようでもNO JAP CITYと言う張り紙をいたるところで見ます。そして日本の企業が入り、日本人移民が増えると水俣病のように水が汚染されてオーストラリア人は水がめなくなる。また、あちこちにゴルフ場が出来るといふ。また、こちらの人

は三百円位でゴルフが出来ますが、日本企業が買ひ占めると百倍にはね上がってオーストラリア人はプレーが出来なくなり。日本に対する評判が日増しに悪くなります。政府はなんの説明もしてくれません。水俣病はもうなくなつた、あれは特別な企業で

起きたものであるとか、MFPでは日本はどんな形でオーストラリアと協力してハイテクニクを研究しようとしているのか……などの政府の説明がほしいものです。アデレードは日本人は三百人位で、私の住む地区では殆どおりません。とにかく国は金持ちでも個人は金持ちでない日本を分らせるのに苦心しています。私は至って元気です。山らしいところを探して今月末にかけてつもりです。(中村テル)

(編集部宛)

国際シンポジウム報告

花と緑の国際シンポジウムが「ヒマラヤの南側と北側―自然と人間生活の調和」をテーマとして、九月六日(木)、七日(金)の両日にわたり、大阪国際交流センターで開催された。今回のシンポジウムは花博のサテライト・シンポの形で、大阪市大の日中友好学術登山隊の報告の一環として企画された。

講師には中国より、路安民中国科学院植物研究所長以下、植物、植物生態学、地質、環境方面の専門家七名、ネパールより、S・B・マラ林業・植物庁長官以下、植物、薬用植物、放牧地管理等の専門家四名、日本側は、沼田真、依田恭二氏ら五名が参加する、豪華な

顔ぶれで、九月六日には、ヒマラヤの自然と植生、ヒマラヤの花と植物の生活、七日は、人間生活と植物、人間生活と自然保護をテーマとした各講師による発表と討論が活発に行われ、最後に沼田、川喜田両先生の司会による総合討論「自然との調和的共存」が行われた。

参加者は、関係各テーマの専門家をはじめ、本会関係では地元関西・京都支部から、また東京からも来年十一月「ヒマラヤの環境保全」をテーマとした国際会議の開催を計画しているHATの関係者等の顔ぶれも見られた。

発表テーマの中には、大阪市大学の登山隊に参加した若い研究者による極限環境下の植物の生活等のすぐれた内容も見られ、大変有意義な会であったが、しめくりの「自然との調和的共存」では、増えすぎたヒマラヤ地域の人口増加の問題を解決することが先決とのことで、前途多難を思わせた。

(Y・M)

シンポジウムかが

加賀市の秋のイベント「れ・クリエイトかが'90」の協賛行事のひとつ、シンポジウムかが「永遠の旅人―深田久弥を語る」が九月二十九日(土)、同市の文化会館で開かれた。

このシンポジウムには約七〇〇名が参加し、福田赳夫元首相の基調講演をはじめ、フォーラム21、作品、写真、遺品展などもひらかれ、加賀市が生んだ文学者として登山家である「深田久弥」の人間像に触れながら、自然を愛する心の大切さを学んだ。

このシンポジウムは当会をはじめNHK、深田クラブ、加賀山岳会、山と溪谷社、はつしほ会の後援のもとに行われ、当会からはフォーラム21のパネラーとして近藤信行氏(元評議員)が参加したが石川支部の会員の顔も会場のあちこちに散見された。(小倉 厚)



図書紹介

福井の山150

増永迪男著

一九八六年の五月に経ヶ岳(一六二五m)に登った時、山中で東京から来たという単独行の若者に出会った。越前の山も全国的に知られるようになったのだなど、ある種の感慨があった。

事実、越前や美濃にはいい山が多い。京都の高校山岳部には、北山で足慣らしをした後、越前や美濃の山へ出かける伝統があった。

高度はさほどではないが、これらの山域には登山家の心に訴える何かがある。それは、自然との本当の触れ合いかもしれない。今でこそ林道が奥までも入り、登山道が整備された所もあるが、かつては道らしい道はほとんどなかった。それがまた、若い登山家を鍛える道場の役割も果たした。

ワラジがけで沢を溯り、尾根の藪を漕いだ。時には大きな滝にぶつかり、ブナの林の中で星を仰いで寝た。藪がすっかり雪に埋まった残雪期には、スキーで彷徨した。「福井の山150」の目次を見ると、かつて登った懐かしい山々の名が並んでいる。越美国境の美濃俣丸、笹ヶ峰、金草岳、冠山、若丸山、九頭竜川上流の経ヶ岳、平家岳、法恩寺山、京都から近い若狭の山々。若丸山には著者の増永迪男さんと一緒に登った。いずれも忘れ難い山行である。

増永さんは越前の名門酒造家の出で、これらの山々をホームグラウンドとして育った。福井県の「日本海作家」同人であることからわかるように、文章はつとに定評がある。

新聞連載から単行本になったこの本

には、九頭竜川水系や日野川水系など十一項目に分け一五五山を紹介している。「福井に生まれて福井に住んでいるから、福井の山に肉親にたいするよいうな感情がある」(後記)と書かれているように、各編とも郷土の山への愛情が行間からにじみ出ている。それぞれにきれいな写真が添えられているが、積雪期のものも多い。それがこれらの山域の特色も現している。写真を見て明解な文章を読んでいると、まだ登っていない山への登高意欲がわいてくる。座右にぜひ置いておきたい本である。

一つだけ注文をつけておきたい。越前の荒島岳を語る時、枕詞にほぼ百パーセント「百名山」がついて回る。この本も例外ではない。私自身が荒島岳をさほど評価していないせいもあるが、荒島岳を語る場合、必ず他人の言葉を借りなければならぬ、というのはいかがなものか。「百名山」の人氣は高まる一方のようだが、しよせん個人の好みの問題なのだ。郷土の山を知りつくしている地元の人なら、特に自分たちの感性にあふれた言葉で語ってほしいと思う。

平成元年十一月十五日 ナカニシヤ
出版刊 三二七頁 定価三〇〇〇円
(四手井靖彦)

Avalanche Safety for
Skiers & Climbers

Tony Daffern 著

A四版、一七二頁の本であるが、登者と山スキーヤーのために実際的な雪崩対策の詳細が書いてあって無駄がない。内容のレベルは高い。

写真が豊富に使われている。スキーヤーが板状雪崩を起しながら無事に乗り切った決定的瞬間の二枚の組写真もある。

十章から成立っていて、気象、雪を観察するやり方、雪崩危険の認識、判断の仕方と進んで、ルートファイインディングになる。

救出には時間と生存率の関係が書いてある。ヨーロッパとアメリカの統計は多少異なるが、随分厳しいものである。雪崩に埋められた人の捜索法にはゾンデ他いくつもの方法があるが、現段階で最良の方法は雪崩ビーコンであるとしている。

埋められたら、パーティの仲間がビーコンを受信に切替えて発振源を探すのである。

五十以上の距離であれば一人で十分間で探しあてる事ができる。その探し方も、あてずっぽうではだめで、適切

(自然保護随想)

カミさんの話

カミさんと付き合うようになってまもなく半世紀を迎えようとしている。嬉しいときも悲しいときも共にあゆみ、時には一人になりたいのだがなかなか果せないでいる。相手も相当にお歳のはずだが、色白でますます若い見える。

昔はカミさんの仲間も多くなかった。ティッシュペーパーもコピー用紙などもなかった。ところが昨今は机上に水がこぼれてもカミさんのお出ましである。パルプ100%の生娘になんの恥じらいもなく始末をさせる。そして二度と我々に顔を見せてくれることはない。そんなにおばさんになった訳でもないのに、トイレのロール紙とこの種のものはどうしても再生できぬらしい。

一箱のティッシュペーパーを作るのにかなりの原木が使われるそうだ。昔は国際結婚などは物珍しく、カミさんの生まれも育ちも純国産であった。今では世界各地になやり方の解説がある。

周波数は二二七五ヘルツのもの、四五七ヘルツのもの二種類の別がある。

新しく登場するものとして雪崩バールの紹介がある。一二〇センチに膨むバルーンで、雪崩の表面に出易いようだとしている。

ルートファイインディングの基礎になるのが積雪層の観察であって、いろいろな方法で雪の層の強度を推測して、

生家があり、地上の野山から緑一枝、立木一本が消えてゆく。こればかりではない。カミさんのお化粧品には多くの水やエネルギーが使われ、これが地球の温暖化・環境悪化に協力している。

人間活動の巨大化、生活水準の向上が地球環境を悪化させている。これに世界の人工増加が拍車をかけている。ひとり当たりのエネルギー消費量は、今世紀はじめに較べて約三倍に達しているという。これはよって一年間に吐き出される炭酸ガスの量は、二〇万トンカーで約一〇隻分になるそう。炭酸ガスの有効な除去技術は残念ながらまだない。たとえ近い将来開発されたとしても、その捨て場はない。経済大国でお金を払えば済むことなのだろうか。

何とか山地のブナ林を守るのもよい。リゾート開発から地域を守るのもよい。しかし、まず足元から見つめ直すではないか。本当に必要なもの、無くてもよいものとの区別をし、カミさんを大切にすることから始めようではないか。一人ひとりがエゴを克服し、一致協力できなければ、子供たちへ引き継ぐ自然はない。(小西奎二)

これが切れて滑り出すかどうかを判断することになる。二章にわたってマクロとミクロの見方が種々述べられている。

雪崩にまき込まれたときは FIGHT FOR YOUR LIFE と見出しがあつて、「命のために頑張れ」と雪崩の中で、もがき方、泳ぎ方が書いてある。迫力のせまる章である。

一九八八第五版 Rocky Mountain

(学生部よりお願い)

来る十二月二日、第27回皇居マラソン大会を行います。本大会成功のため会員の皆様より賞品のご寄付をお願い致しております。なにとぞよろしく暖かいご支援のほどをお願い申し上げます。(学生部委員長・川上順)

Books社、Calgary, Canada 発行
本会図書室蔵 (松丸秀夫)

遙かなるチベット

希夏邦馬峰登頂

シシヤパンマ8027m

愛知学院大学山岳会編

愛知学院大学山岳会では、一九六〇年代後半より、メンバーのうちの誰かが毎年のように海外の山へ出かけている。これらの活動は一九八九年三月のシシヤパンマへと続く。本書はその報告である。内容は活動編(登山隊、学術隊―歯科疾患と飲料水調査、医療の各報告と隊員プロフィール)と資料編(登山隊、学術隊、学術支援隊の各日誌、隊員手記、その他)で構成。 やや片寄った読み方ではあるが、筆者は遠征隊の報告書の類いでは、隊員の手記や感想の箇所に興味を惹かれる。そこで、その項の感想を一つ二つ。 登頂隊員の石川氏は五十二歳。五十七歳を越えて六千級級のヤン峰に登頂した方だが、八千級はまた別とばかり、遠征前から黙々とトレーニングにはげむ。惜しくも七三〇〇で引き返したが淡々と述べられた手記では、目標に向かうひたむきさが行間から伝わってくる。さらに学生で参加した若い人たちの手記で、彼らが逡巡、感激、そして反省へと体ごとぶつかってゆく様が初々しく述べられている。この中から

また素晴らしい岳人が育っていくことだろう。

カラー写真をふんだんに採り入れて視覚の面からも訴えようと工夫されている。 一九九〇年二月刊 成文堂発売 一二六ページ 二〇〇〇円 (泉 久恵)

山への挑戦

―登山用具は語る―

堀田弘司著

一七八六年モンブラン初登頂から、ヒマラヤの巨峰十四座に登頂したR・メスナーにいたる「山への挑戦」が綴られる。そこには、すぐには受け入れられなかったママーリーの「より高きを、より困難を」という近代スポーツアルピニズムのあくなき高揚がある。 この栄光と悲劇の登山史の陰の主役は「登山用具」である。ヨーロッパアルプスを舞台に、その誕生と変遷が語られる。マッターホルン初登頂のザイル切断、ウェストンの笠ヶ岳での靴と草鞋、アイガー北壁初登でのアイゼンの威力と興味ある話はずきない。まさに「草鞋から登山靴へ、雑糞からルックザックへ、金剛杖からピッケルへ」の用具の歴史が、わが国でも登山史そのものの感である。しかし昨今この用具

と技術の進歩で登山の尖鋭化のいきつくところを知らない。南米パタゴニアのセーロ・トールレ岩塔の埋込ポルト乱打事件をとりあげ、「岩をきずつけ、自然をこわして、本当の登山だろわか」と問い直す。「何がなかったからこそ得られた歓びもあるはず」という結びの言葉が読後印象にのこる。長年クライマーとして、また登山用具の専門家として、実績にうらづけられた筆致から著者の実直な人柄が偲ばれる。厳選された、貴重な美しい写真、スケッチもまた楽しい。 一九九〇年六月 岩波書店刊(新書) 一二二ページ 定価五五〇円 (尾崎 進)

北大山岳部々報 13号

北海道大学体育会山岳部編

伝統ある山岳部の一九八三年から一九八八年までの六年間の記録である。 主な内容は、特集、山行記録、海外山行報告、研究、紀行、追悼などで、特集「ルームの可能性」では、部員が現在悩んでいるメイン山行、赤岩での岩登り、海外遠征、合宿を現状分析し、活性化を模索、新しい発想を提言し、一九九〇年代への展望としている。 一九七九年三月の知床遭難(東岳稜線直下でテントを積雪でつぶされ、下

山の途次二名が疲労凍死)を反省に「冬山のヤバイ天場」が論議され、イグルーの利用を再評価し、研究欄で雪のブロックを急勾配から水平に積むことができる「くさび技」技法を図解入りで説明している。

海外登山としてインドヒマラヤ・スダルシャンパルバート峰、ソ連領パミール・レーニン峰がある。報告に昭和二年に建築されたヘルベチアヒュッテの大幅な復元改修工事と、ヒュッテの生みの親であるグプラー氏を偲んでいる。

「千島・カムチャッカ研究」は、極東の山にロマンを求め、二十年先に行けるかも知れないと始められたのが、ペレストロイカが進むなか、明日にも希望が持てるようになり、時を得た発表である。千島列島に関する戦前の日本の記録や、ソ連の学術書、東ドイツのカムチャッカ写真集を参考に、地形、気候、植生の概説、各山の紹介、噴火概況などを、概念図、写真、スケッチを付し紹介している。

付録に日高山脈鳥瞰図(B3版)が添えられ、前後の見返しページには十勝連峰北西面とカムチャッカ半島の鳥瞰図がある。

平成二年五月一日 B5版 札幌市 北区北一七条西七丁目 北大サークル会館内 北海道大学体育会山岳部

発行 本文三二六頁 定価五五〇〇円

(高澤光雄)

報告

冬期マッキンリー峰の登山と気象遭難(3)

科学研究委員会

〔質問〕植村直己の遭難は気象遭難ではなかったのか。

〔安田武氏(武庫川女子大学教授)の説〕植村直己は当時デュポン社の新素材を用いた肌着と防寒着を着用していた。これら新素材は低温室では十分な通気・保温性を示したが、これに風が加わったりすると、肌着の撥水性や、防寒着の大きい通気性が禍して、汗などがウールに吸収されることなく、防寒着の外部に出て水結し、その結果透湿性や断熱性まで低下し、内部まで水結することも起ったようである。彼は日記にも今回は寒くてしようがない。寝ていても寒いと記している。遭難の第一要因は着用衣システムの不具合にあったのではなからうか。

〔広瀬潔氏のコメント〕このように科学者と登山家が一堂に会して話し合うのは意義のあることだ。唯一点、会報五三四号に記したように、遺体発見の場所や状況から判断して、滑落はデナリパス付近の稜線上ではなく、西側に

少し下降した地点で起ったと考えられる。

4. 冬期マッキンリー峰の遭難と気象
日本気象協会 奥山 巖氏

二月二十一日、山田隊のテントに立寄り雪洞の位置を聞いて下ったオーストラリア隊の報告によれば、翌日三三五〇呎の自隊のテントから、山田隊がテントを修理しているのが見えた。また二十三日の朝は晴間もあった由である。これらの点から山田隊は二十三日にアタックの行動を起し、その夜から翌日にかけて遭難した可能性が大きい。二十六日まで山頂付近は猛吹雪であったようだが、二十四日以降吹雪について行動を起したとは考えられないからである。

この前後の様相をフェアバンクスとアンカレッジの五〇〇mb(五七〇〇呎相当)の高層天気図から調べて見た。二月十四〜二十日はプロッキング高気圧の真中であって、好天弱風であったが、二十一日以降、高気圧は弱まりつつ東進、マッキンリー付近は次第に風が強まってきた。二十三日の地上天気図によれば、午前中は未だ高気圧圏内にあり、C5付近では気温も高くなく、15℃位、風速は15m/s程度で、晴間位でいたかも知れない。その後温暖前線が接近してきてくもり、山中ではオーストラリア隊の記録の

ようにガスとなった。一方風向はSW ↓W ↓NWと変化し、風速も次第に大きく、二十三日午後遅くから夜にかけてはNWの風三十〜三十五m/s、気温は15℃となった。ただし風速は自由大気中のもので、デナリパスでは西方に尾根が張出しているため、北西からも南西からも容赦なく強風が吹上げてくる上、周囲の岩稜的地形の影響で風速差の大きいシアアを生じ、突風の瞬間風速は倍の六〇〜七〇m/sにも達したものと考えられる。発達した低気圧はベーリング海峡を通過して北東進し、二十五日、二十六日もSW 二十五〜三十五m/sの猛吹雪となっている。

アラスカの冬は大体周期三〜五日で低気圧や谷が通過し、その度ごとに強風低温の悪天がくり返される。しかも風の強弱や気温の変動幅の大きいのが特徴である。たとえば二月二十三〜二十四日の風速は二十〜四十m/s、気温は15〜10℃。従って登山期間が五日以上の場合、十分極端な状況にぶつかる可能性があり、警戒を要する。

冬期の風について、五〇〇mbの風速をアラスカ、ヒマラヤ、ヨーロッパ、日本について比較してみたところ、平均値は日本の輪島が少し大きいだけほぼ一致した。しかし個々のデータのばらつきはそれぞれ異なり、輪島が最も大きく、次にアラスカ、そしてヨー

ロッパは最も少なかった。これらの違いはその上にある寒帯前線ジェットや亜熱帯ジェットの影響によるもので、年によっても差があるが、マッキンリーの場合、いったん荒れだすと風速・気温ともに平均値から大きくはずれ、風向も定まらないという特徴がある。これに対しヒマラヤは八〇〇〇呎であるため厳しくなり、日本は三〇〇〇呎であるため最悪条件をまぬがれているといえよう。なお山田隊が遭遇した二月二十三〜二十四日には強風軸の北側をあいにく気圧の谷が通るという、風速を助長するようなケースに相当していた点もつけ加えておきたい。

参加者(順不同) 岡野修、徳久球雄、千葉重美、小野里英次郎、川島栄三郎、渋谷千秋、奥野道治、中村純二、中村あや、渡辺恒美、渡辺玉枝、広瀬潔、浜口欣一、鳥居亮、大塚玲子、高橋詢、今西寿雄、大塚博美、橋本行雄、鴨原啓佑、笠井篤、松田雄一、奥山巖、園山鋭一、園山崇子、的場大祐、大井正一、安田武、原謙一、大蔵喜福、平井拓雄、鳴原一男、大島輝夫、石川弘、松丸秀夫、藤田礼子、織田沢美智子、赤松光、森武昭、石井恵美子、松村潤、須藤節子、早川瑠璃子、田中京子、川合愛子、梅野淑子、木本哲、関口令安、仁平祐紀夫、神長幹雄 以上五十名。
(中村純二)

お知らせ 本講演会の予稿集『冬期マッキンリーの登山と気象遭難』三七頁、および『登山用雨衣シンポジウム』報告書三二頁、並びに『山岳地域における自然エネルギー利用に関するシンポジウム』予稿集四六頁、はいずれも残部少々あり、頒価は一部につき五〇〇円です。ご希望の方は、希望冊子名、部数など明記の上、代金(送料不要)を添えて、日本山岳会事務室気付科学研究委員会宛申込んで下さい。

第十四回 若葉会山行

集會委員会によって、例年行われている若葉会山行は、六月九、十日に宮城県鳴子町鬼首高原荘をベースに、地元宮城支部の多大のご協力で行われた。山は栗駒国定公園鬼首地区の秀峰禿岳(一二二六・一)である。

東京発夜行バスで、九日早朝に到着した一行は、宮城支部会員に迎えられ、休憩後、午前九時バスで登山口に向った。総勢四十七名である。

当日は、折悪しく前線が通過中で、はげしい風雨が時折り、吹きつける天候で、目指す山々も雨雲の中という出発になった。

途中で、当初の計画であった火の沢コースを変更し、花立峠―禿岳往復コースを辿ることになった。花立峠からのコース、上り九十分、下り六十分

の道なので、コースの多くはブナ林を辿る尾根道である。風雪に耐えた新緑のブナの樹間には、ウラジロヨウラクの優美な淡紅色の花が散見され、東北の山らしい雰囲気を感じさせている。林のきれた岩場からは、恐らく雄大な景観が望めたであろうに、濃いガスの中で無念の思いがする。

頂上も相変わらず冷気が激しかった。その冷気を吹き飛ばすかのように活気ある談笑がしばらく花咲いた。盛んなカメラのシャッターの音の後、三々五々同じ道を下山に移る。

峠に戻る頃から風雨もやや治まってきた。峠の草原は、みずみずしい山草に埋まり、大きなフキの葉を土産にする人もいた。

今回の山行は、あいにくの悪天候で突然のコース変更もあり、山麓のスキー場から峠までは、宮城支部会員のマイカーによるピストン輸送というハブニングになった。

峠からは、往路と同様にマイカーに分乗し、地元会員の皆さんの献身的な奉仕に支えられて一路宿舎に向った。夜は、コニーデ型火山の特徴をもった鬼首周辺山地のお話を伺った後、懇親会に入った。地酒を戴き、山の味覚を楽しみながら、地元会員の美声で歓迎を受けた。支部長さん特製の珍味、サクラ湯様のホクホクの塩漬けも戴い

た。翌朝は前日とは打って変わった快晴で、外輪状に連なる雄大な禿山地に、見とれながら、山を背景に記念撮影が行われ、今回の山行の幕を閉じた。

魅力に富んだ禿山の山容は、前日の悪天候を吹き飛ばす思いであった。静かでウエットな東北の山を後に、宮城支部の方々に別れを告げ、帰路、鳴子峡、鳴子町こけし会館に立ち寄りバスは東京へと戻った。(田村説三)

ビアパーティ

婦人懇談会

九月一日(土)五時より、慣例のビアパーティが開かれました。

当番をお受けして、その日の一日快晴で、暑くて、ビールが飲みたくなるような日でありますように、と秘かに願っておりましたが、期待通りの好天で、きつと盛會間違いなしと、まずは、ほっとしました。思った通り、出足は好調で、六六名の会員をお迎えすることができました。

定刻にはすべて準備整い、大テーブルの上には、婦懇特製のクッキーからサラダ(使ったじゃがいもは、会員の手による有機栽培の品とのこと)おでん、おにぎりにいたるまで、色どり美しく、しかもぎっしりと並べられて、

会場となった集會室は、華やかな空気に包まれました。

開宴前のショートスピーチは、佐藤知恵子さんが、最近登られたインドネシアの山のことを、写真と図をそえて話され、続いて南川さんの二五〇〇以上の山完登にまつわるとっておきのエピソードと、大変興味深くお聞きしました。

今回は関根吉郎名誉会員に乾杯の音頭をお願いして、その後は十分に喉をうるおし、皆、手も口も動かして賑やかな宴会となりました。大きな人の輪、小さい輪、黙って飲む方、静かに座っている方とさまざまにこのひとときを楽しみ、過しました。

ようやく八時を過ぎて、またの機会を約し、今年のパーティは終了しました。入会して日の浅い私も、ほんの少しのお手伝いで、素敵な出会いに胸をはずませた一日でした。(中西光子)

会務報告

九月理事会

九月十三日 十八時三十分
場所 本会会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、重広、入沢、穴田、小倉、関口、織田沢、石橋、藤井、伊丹の各理事、太田、飯野両監事、小

倉、大島、平林、橋本の各常任評議員、沢井自然保護委員長
 委任出席 小林、早坂、山本、神崎、松本、藤本各理事、大森常任評議員
 議事

(審議・承認事項)

(1)上高地山研、改築案検討の件(石橋)

かねてより山研委員会で検討中の本件は、増築の許可折衝、地元および関係者とのコンセンサス、所要資金の検討等をすすめてきたが、十分に可能性があるとの結論に達したので、別途山研改築特別委員会(仮称)を組織して推進して欲しい旨の提案があった。

本件種々検討の結果、資金面で若干の不安があるものの、改築する方向ですすむことを承認し、直ちに特別委員会を作り、具体的準備にかかることにする。

(2)ナムチェバルワ登山の件(重広)

中国登山協会に対し、許可申請中の本件は、具体性が出てきたので、プロジェクトを発足させることにし、メンバーは、当面、山田会長と担当理事である重広、伊丹、早坂をもって構成し準備にかかるとにする。なお、アジア大会終了後に、山田会長および前記委員一名を北京に派遣、CMAと具体的な交渉を行うことにした。

(3)「海外登山基金」第二回助成に対する予算措置について(重廣・西村)

平成二年度分としては、既に二隊に対し、計二五〇万円の助成金の支出を執行しているが、プレモンスーンの隊も考慮して、本年度に限り、再度十二月末の締切りをもって、平成二年度内に三〇〇万円の追加助成を行いたい旨の提案があり、本件承認した。

なお平成三年以降は、プレ、ポストを包含する年一回の締切り(十二月末)で、実施することも併せて確認した。

(報告事項)

(1)ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストの件
 四団体で準備をすすめることになった本件は、十月十六日(火)、国際文化会館で発会式を行うことになった。

(2)第一回海外登山基金助成各隊の報告
 東海支部雪蓮峰隊は、八月十二日全員登頂に成功。高所・青年部合同第一次。パミール登山隊も、七月二十七日コルジエネフスカヤ峰に四名、八月六日レーニン峰に六名が登頂した。

(3)三國友好登山隊残務整理費の監査報告(太田監事)
 公式報告書の刊行をもって、残高ゼロとなり、すべてが完了した旨の報告があった。

(4)山梨支部総会報告(村木)
 (5)タンポポチェ募金報告(伊丹)
 本年十二月をもって締切りたい。

(各委員会報告)

・自然保護(沢井)
 九月十五〜十六日、三島において、全国自然保護集会を実施の予定。
 ・集会(入沢)
 九月十五〜十六日上高地山研、スケッチ山行、十月二十〜二十一日小川山で岩登り山行を実施の予定。

・総務(藤井)
 十月五日、三〜八月に入会された新入会員を対象とした、会員懇談会を実施の予定。十月十三日の山形での支部事務局担当者会議は、支部からの要望事項を聞くことを重点に行う予定。十一月一日の年次晩餐会の会費は一万三千円と決定。

・山研(石橋)
 八月末現在の利用者数は四三七名で昨年より五〇人減。十月二十七日閉所の予定。
 ・医療(関口)
 七月十四〜十五日、登山医学シンポジウム、十周年記念パーティー、十六日、マリオンにおける公開講演会は、ともに盛会裡に終了した。

・科学研究(関口)
 十一月十七日第二回「登山用雨具」についてのシンポジウム。来年二〜三

月には「疲労、トレーニング」、三月以降に「山小屋のし尿処理問題」をテーマとした研究会を予定している。

・ルーム日誌

- 1日 ビアパーティ
 - 3日 総務委員会
 - 4日 婦人懇談会、自然保護委員会
 - 5日 山研、集会、総務、青年部
 - 10日 HAT委員会
 - 11日 図書委員会、自然保護委員会
 - 12日 常務理事会
 - 13日 理事会
 - 17日 フィールド委員会
 - 18日 資料委員会
 - 19日 山研委員会、三水会
 - 20日 婦人懇談会
 - 25日 自然保護委員会
- 9月来室者420名

.....
 会員異動 9月
 退会
 大佐々哲夫(五九四九)

物故
 米田 泰男(四二三七) '89・9・23
 高木健太郎(九五三四) '90・9・24

次代に残そう美しい山と溪

図書受入報告

図書委員会

平成2年9月受入図書

1. 佐瀬稔著「ヒマラヤを駆け抜けた男」東京新聞出版局 1990 (発行者寄贈)
2. 長野県編「長野県史 近代史料編 10-2」長野県史刊行会 平成2 (発行者寄贈)
3. 坂倉登喜子編「女性のための百名山」山と溪谷社 1990 (発行者寄贈)
4. 日本野生生物研究センター編「新美しい自然公園6 登別、昭和新山」自然公園美化管理財団 1990 (発行者寄贈)
5. 山岸行輝著「鱒釣り師」山と溪谷社 1990 (発行者寄贈)
6. 小倉董子著「山歩き讃歌」共同通信社 1990 (発行者寄贈)
7. 内田良平著「カラー版 楡, 穂高, 上高地」東京新聞出版局 1990 (発行者寄贈)
8. 中西俊明著者「カラー版 北岳, 仙丈, 甲斐駒」東京新聞出版局 1990 (発行者寄贈)
9. J. ウィルカーソン著「改訂新版 登山医学」東京新聞出版局 1990 (発行者寄贈)
10. 鈴野藤夫著「丹沢釣り風土記」白山書房 1990 (発行者寄贈)

姓名変更

山本 浩(七三三九) ↓金子 浩

タンポチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

一万円—藤平正夫。五千円—永田秀樹、黒石恒。

十月二日現在累計二九六名、累計金額二、八七九、〇〇〇円



この電話でもお知らせしています
☎ 234-665

◎八方尾根スキー集会

雪のシーズンになりました。恒例のスキー集会を八方尾根にて行います。会員の楽しい交流の会となるよう、皆さまのご参加をお待ちしています。

期日 一月十二日(土)〜十五日(火)
場所 八方池山荘(八方尾根第一ケルン)

会費 二万三千元

定員 五十名

申込締切り 十二月二十五日

〒242大和市下和田一二四六富沢荘二号

会費振込先

湯本一彦

協和銀行府中河原支店

日本山岳会集

店番199普通599373

会員頒布オリジナル製品

リスト

日本山岳会では会員へのサービスとして、次のようなオリジナル製品を作り頒布しております。ぜひご利用下さい。

なお、郵送をご希望される場合は送料をご負担願いますので、ご了承ください。

*クラブタイ

正絹製(エンジ、紺) 五、〇〇〇円

化繊製(エンジ) 二、〇〇〇円

*ネクタイピン

七宝製 八〇〇円

銀製 二、〇〇〇円

*クラブバッヂ

正章(銅製、番号なし) 五〇〇円

略章(七宝製) 五〇〇円

銀製ピン止め式 一、五〇〇円

*灰皿

携帯用 五〇〇円

ハーケン型(五枚組)

一、〇〇〇円
(総務委員会)

オリジナルTシャツ

特別頒布のお知らせ

多くの皆様より要望のありましたクラブマーク入りTシャツを特別に製作し、今回頒布することになりました。

素材はアメリカのデュボン社が開発した乾式アクリル繊維で、保力に優れ、即乾性抜群の「オーロン」80%と綿20%の混紡です。汗をかく登山にはびったりのすぐれもの。ご期待下さい。

*半袖Tシャツ 二、〇〇〇円

(サイズ/M、L)

(カラー/ブルーグレー、イエロー、アザレア、ミントグリーン)

*長袖 三、二〇〇円

(サイズ/M、L)

(カラー/イエロー、ブルーグレー、グレー)

郵送の場合は送料もかかりますので、支部の会員はなるべくまとめてお申し込み下さい。
(総務委員会)

年次晩餐会は十二月一日新高輪プリンスホテルで

●古典山岳映画(ビデオ版)
鑑賞会

日時 十二月十一日(火)十八時三十分
より

場所 JAC集会所

映画題名

一、冬の立山・針の木峠越え

伊藤孝一作品・大正十二年

一、エベレスト(マロリー)

一、ナンダコット(立教大山岳部)

昭和十一年

解説 羽田栄治委員

フィルム委員会

●忘年会のお知らせ

集會・総務・婦人懇談会共催

日時 十二月八日(土) 五時より

場所 日本山岳会 集会所

会費 二千元

*一人五百円位の品物をご持参下さい。
い。プレゼントの交換をします。

もう一年が過ぎようとしています。

楽しかった山の話や、苦勞した山、大

いに飲んで、来年への夢を語りましょ

う。新入会員の皆さん大歓迎です。

訂正 九月号(五四三号)十頁、

俳句前より三句目、狸々袴とある

のは狸々袴が正しいので訂正致し

ます。

平成二年十一月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(261)四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一―三一六

赤坂グレースビル
印刷所 株式会社 技報堂